第1分科会

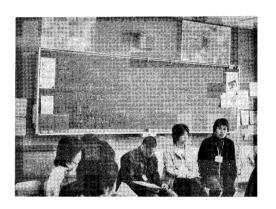
新聞から読み解く子どものイメージ

~ おとなからみた子ども・子どもからみた子ども~ 子どもの視点から身近な問題を追究する情報誌 EFC(Ever Freedom for Children)

■はじめに~EFCの立ち上げの経緯

共同代表: 辻井悠(司会)、黒河内政行(説明)

黒河内と辻井は別のところで子どもの権利に関する 活動をしていましたが、その中で、自分たち子ども自 身が発言する機会というのが奪われているんじゃない か、また、いろんなメディアが情報を発信しても専門 用語や文章形態が難しくてよくわからず、結局、子ど もが知りたい情報(知らなければならない情報)を得 ることはとても難しいのではないか、ということを感 じていて、子どもが書いた記事を子どもに伝える情報



誌をつくろうということになりました。この分科会では、まず身近なメディアである新聞(大人がつくったもの)について話し合い、それから、子どもとしてメディアをつくっている側の意見を聞く場とします。

■ワークショップ

ファシリテーター: 黒河内繁美

子どもに関する最近の新聞記事を用意し、子ども・おとなのグループで、記事を読んでの感想を語 り合う。その後、話し合った内容を報告しあい、子どもとおとなの視点の違いを考える。

■話し合った感想

子どもグループ2つ、おとなグループ2つ

意見の集中したのは、11月1日に大阪府内で起きた家族殺傷事件について「優等生の暴走なぜ」という見出しの記事(毎日11月2日)と、「霧の中の殺意」という記事(朝日11月13日)でした。

●子どものグループの意見

- ・そもそも「優等生」って? 成績のことか素行のことか。「劣等生の暴走なぜ」って書くより「優等生なぜ」の方が人目をひいて記事として盛り上がるから書いているんじゃないか。
- 「家族への感情のなさ」ってあるけど、家族への感情がなければ殺そうなんて思わないんじゃないか。
- ・「霧の中の殺意」の記事で、少年の通った高校の教師の「校内でパンを食べ歩き教師とすれ違っても隠

そうともしない」というコメントを出して"若者がそんなふうに乱れているから殺人がおこる"って感じに書いてあった。でも、おにぎりとかパンとか食べたからって人殺そうと思わないやろ。「うそつきは泥棒のはじまり」みたいな記事。

●おとなのグループの意見

・「少年事件が起きるとすぐ精神科医だとか専門家が出てきて、その言葉が親にも子にも強迫観念となる気がする」という意見の人と、「どうしてこういう事件がおきるか理解できないから精神科医の意見が知りたい」という意見が出るなど、同じ記事を見てもまったく違う感想があり、それをお互いに尊重しながら話し合えたことが良かった。



・この事件では彼らのホームページが注目されているが、「(子どもたちにとって)心を表現する場がないからホームページがあるのでは」という意見と、「規制が必要では」という意見が出た。それに対して「規制することで子どもが表現する場がなくなり、それでまた子どもの意見が出せなくなるのでは」といった意見が出ました。

- ・ 当事者の子が読んだらなにを思うのかな?
- ・以前、事実を知っていることについて書かれた新聞記

事を読んで「こんなふうにかかれるのか」と思った。(新聞は)めずらしそうな事件をとりあげて人を ひきつけると思う。

■EFC以外の子どものメディアをつくる人たちから

- ・子どもに対する決め付けはイヤだという意見が方々からでましたが、それに対抗する手段として、子ども自身が発信する、大人だけがつくっているメディアという世界に入っていくという趣旨で『VOICE』というメディアをやっています。決め付けというのは子どもにだけでなくていろんなところで起きていて、そういう声なき声を伝えていきたいのですが、今日聞いた意見がすごくヒントになりました。(『VOICE』土田さん)
- ・テレビみないし新聞も読まないので、外の情報はだいたい友達から仕入れています。久々に新聞を 読んで「新聞ってこんなもんなんや」と思いました。/グループの中で話しすぎてしまったように思 い若干後悔。こういう記事読むと「なんだこの記事は」「日本の人たちはこんな記事に踊らされている のか!」と怒っているのですが、そうやって自分も踊らされているのかな、と思いました。(『さくら ウェーブ』三森さん・山本さん)

■参加者の感想から

・すごく痛快な時間でした。「これって変じゃない?」と思っても、近所の人ではそれ以上言うと変な 人と思われてしまうので。

- ·僕 32 歳なんだけどおとなでもキレるときはきれると思います。
- ・参加して、いかに自分が決め付けていたか、子どもに 差別的だったかと思いました。
- ・私は新聞をとっていないのでニュースをみますが、見 ていると感情的に「なんでこんなことするんやろ」と思 ってしまうけど、一緒に見ている人が「その人の状況も



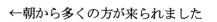
考えてみな」と言うのでケンカになるんですが、同じ記事だけでもいろんな捉え方ができて、これからひとつの事柄でもいろんな視点から見ていくことを意識したいな、と思いました。

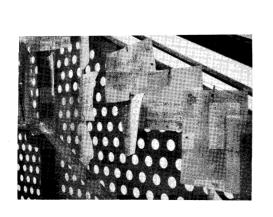
・川西に住んでいます。最初、「場違いかな?」と思ったけど、いつもお母さんとかと「この記事変や」 とか言っているので、今日はあまり発言できなかったけれど、色んな人の意見が聞けてよかったです。

(参加者人数:最年少7歳を含む19人)



1日目の全体会の短冊も飾りました→





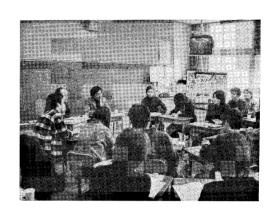


座談会「不登校の子どもたちとともに」

不登校生の親の会 ういんぐ

川西市内にある不登校の子どもの親たちのグループ「うぃんぐ」が企画。神戸フリースクースクール(KFS)の子どもたちやおとなたちをゲストに交流しました。

この企画の根っこには、川西市子どもの人権オンブズパーソンのスタッフと「ういんぐ」の親たちとの出会いがありました。子どもたちが置かれている現状への理解と、どうすることが子どもにとっていいことに



つながっていくのかを、「家族ってなんだろう」「学校ってなんだろう」という根源的な問いを通じて 1年間考えてきました。そのあいだに KFS との出会いもあり、新しい出会い、発見がありました。

当日、KFS の子どもやスタッフが 10 人以上、川西市市内・外から 50 人近くと、予想外に教室が一杯に。感想には、多くの人から「元気をもらった」という声が聴かれました。

学校の教室で不登校の子どもたちから元気をもらったということ。そこに、なにかとても大事なことが含まれているようで、3ヶ月経った今もあの時の笑顔や光景を思い出します。

KFS の子どもたちと代表の田辺さんが小さい円になり「しゃべり場」を、そのまわりを参加者が取り囲む形で座談会は行われました。田辺さんからは、十数年子どもたちとかかわり確信をもって不登校は大丈夫、というメッセージをおとなに対して、子どもたちからは不登校のきっかけやKFSに来て感じたこと、親や学校についての思うことを言葉として語ってくれました。参加者一人ひとりが、その言葉ひとつひとつを聴きもらさないように受けとめている姿が印象的でした



今回'すすめ役'だった私自身は、子どもや参加者の 声を通じて、教育行政のしくみにおいても、子どもの権 利を踏まえてちゃんと一人ひとりの存在を見守り保障す ることが求められているとあらためて強く感じました。

最後に、第2分科会に集ってくださったみなさん、そして KFS の子どもたちと時間を共有できたことに感謝したいと思います。ありがとうございました。

ジェンダーってなぁに?

"ジェンダー" が子どもたちにもたらす問題を考える

ーSEAN G-Free マログラム体験と子どもの意識調査報告ー 特定非営利活動法人 SEAN(シーン)

■実施内容と目的

SEANでは2002年度 IYF&松下電器子どもサポーターズ☆マッチング基金の助成を受け「ジェンダーと暴力」をテーマに、オリジナルの人権教育プログラム G-Freeを開発しました。2003年度もまたルーセント・テクノロジーIYF青少年育成基金の助成を受け、教員研修15回・中学校5校20クラスと高校3校5クラスで授業とアンケート調査を実施しました。

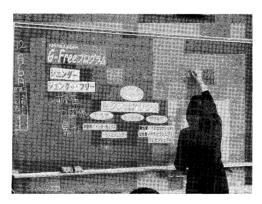


実際に子どもたちに実施しているワークショップを参

加者にも体験してもらい、参加者自身"ジェンダー"(社会的・文化的につくられる性差)に気づき、 その気づきを通して子どもたちにもたらす問題について考える場を持ちました。

「女(男)はこうあるべき」といった"ジェンダー"が日常の中に蔓延していると、性別により子どもたちは自他を否定し、将来の生き方を制限してしまう事があります。また、「男は強く・泣かない・負けない」「女は優しく・従順に」といった過剰な"ジェンダー"からは暴力の加害者や被害者が生み出されることも多々あります。

昨年度実施したアンケート調査(中学2校8クラス252枚)では、「今度生まれてくるとした



らどちらがいい?」という質問に対し、女子中学生(女2%・男38%・どちらでもいい38%・無記入2%)男子中学生(女6%・男55%・どちらでもいい39%)と女を選ぶ生徒が少ないという結果になりました。女子が男にうまれたいとあげた理由には「なりたい職業に就ける」「自分の意見を相手にいえる」「女の子はもめごとが多い」というような、女性性へのあきらめや否定的イメージが多く含まれ、男子は「女はあんまり得する事がない」

「男は優れているから」といった男性性の優位性が理由にあげられたことが特徴的でした。 また、「女(男)らしくしなさい」と言われている生徒は、「女(男)らしくなりたい」という傾向が

強くなり、「女(男)らしくしなさい」と思う生徒は「女(男)らしさは必要だ」と思う傾向が強くな

ります。そのような捉え方が世の中に必要だと思っている生徒は、同性愛者を差別的に見る傾向が強くなる結果となり、性別による固定的なイメージにとらわれ過ぎると、多様な個の違いを認め合えず 他者の人権を侵害するような差別や偏見が生まれることが結果となってあらわれました。

それらの調査を報告し、参加者と共に子どもたちのありのままを大切にする社会を築くために、私た ち大人のできることについて考える場をもちました。

■参加者のアンケートから

Q1:G-Freeプログラムの中で生徒に、最も役に立つと思ったのはどの部分でしたか? 自分気づき一将来の展望(男性・50代)

劇を通じて、見通しを持って関わる事が子どもたちに勇気を与えるのでは…?と思いました。(女性・20代)

ジェンダーにとらわれないで個を大切にしていくという部分。男の子・女の子がもっと多様な選択をできるようになっていくと思いました。(女性・40代)

どの部分も良かったと思います。生徒の中にもいろいろな考えを持つものがいると思う。自分もまだ

まだ勉強不足なので共に勉強していきたい。(男性・20代)

Q2:ジェンダーフリー教育は学校で取り組まれるべきだと思いますか?

日本は特に性差による男女の役割のすり込みが幼年期から始まっている。多様性を認めることで人権についての偏見も改善されると考えるから。(男性・30代) 大人になってからではなかなか再教育できないけれど、



大人になるとたいていジェンダーからくる問題で苦しむことになる。(女性・30才代)

■分科会を実施して

"ジェンダー"の問題はあまりにも日常化されすぎており、理解を得ることが難しいと日々痛感しています。今回のフォーラムでは、子どもの人権をテーマとした分科会が13会場で同時開催されるということもあり、参加者を確保できるかどうか心配な面もありましたが、予想以上にたくさんの方に参加いただくことができました。

また、実行委員会に参画したくさんの出会いも得ることができ、"ジェンダー"の問題を子どもたちの人権の問題としてとらえなおす良い機会になったと思います。

■これからの取り組み

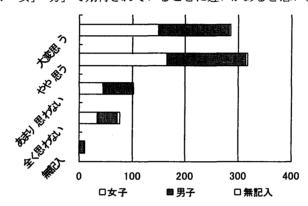
2003 年度の取り組みで多くの子どもたちに出会い、改めて「ジェンダーと暴力」をテーマとした G-Free プログラムの必要性を実感しました。持って生まれた性別により、子どもたちが自己否定や生

き方を制限したりすることがないよう、ありのままの自分や友だちを受け入れ、暴力の被害者や加害者にならないですむ社会を子どもたちと共に築くために取り組みを続けていきたいと思います。

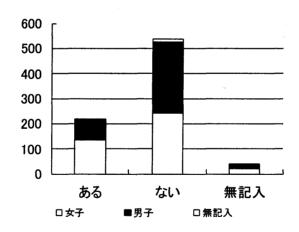
<G-Free プログラム実施後アンケート>

アンケート総数 796 枚 中学生(女子 309・男子 313・不明 14) 高校生(女子 90・男子 70)

Q1.「女」「男」で期待されていることに違いがあると思いますか?



Q2.そのことで自分が否定されたような気持になることがありますか?



(参加者人数: 男性7名を含む26名+スタッフ4名 計30名)

映画「アノサーヒトから人間への記録」&意見交換

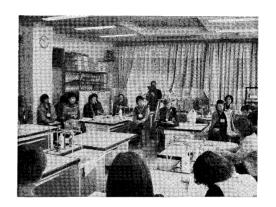
兵庫映画センター

■分科会のねらい

親、教師、保育士のみなさんを対象に、一人の子ども の発達・成長の記録映画を観て、子育てや子育て支援の あり方などを共に考える。

■プロセス

- ・映画を鑑賞(約1時間20分)
- ・参加者から、映画の感想をもとに、それぞれの意見を 述べ合う。



■参加者の反応

子ども達の保育や教育に携わっている人の参加が多かったが、その他にも地域で子育て支援をして いる人、行政の人、等々いろいろな立場で参加されていた。



をしてもらえた映画だったようだ。

主人公アリサの目を見張るような成長の過程や、子どもの持つ可能性の大きさを参加者の多くが映画を通して感じる事が出来たようだった。またそのアリサの姿を通して自分自身の子どもとの向き合い方を振り返ったり、これからはどう向き合っていったらいいのかということを問い直したり、就学前という一人の人間として本当に基本となるこの時期に、何を大事にしないといけないか、何を育てていかないといけないかなど、多くの投げかけ

(参加者人数:40人)

児童労働って何?

国際子ども権利センター 関西事務所

■ねらい

働くインドの子どもの生活を通して、子どもの権利に気づく。

■プロセス

- ・スタッフの挨拶、自己紹介 (4つに折った紙に、名前・どこから来たか・ 最近あったいいこと・好きなものの4つを書く)
- ・ルールを決める(参加・尊重)
- ・インドの一人の働く少年を紹介
- インドの働く子どものスライドを見る
- ・インドの国、文化、教育、カースト制度、(児童労働の背景)の説明
- ・少年の働く様子のロールプレイ(読み書き計算ができないためおとなに搾取される)
- ・グループワーク【1】働くインドの子どものニーズについて話し合う
- 休憩(チャイとお菓子)
- ・グループワーク【2】子どもの権利と権利条約について
- ・働く子どもとNGOとの出会いとその活動の紹介
- ・振り返り、感想

■アンケートから

・インドは特に悲惨だと感じましたが、今世界中で内乱や戦争(イラク等)でおとなも子どもも危険



- にさらされています。今まで、自分の生活の安定だけ を考えていたことに反省しました。
- ・広い視野で、いろんなことを考え、差別等に敏感で ありたいと思いました。
- ・子どもの権利をいかに使うか。
- ・インドの子どもが置かれている状況について、真剣 に考えている人に出会えて有意義でした。
- ・もっと多くの子どもたちに参加してほしかった。
- ・外国の様子を知るよいきっかけにはなると思います。 残念な点は日本に住む人が日本に住む人の視点で外国であるインドを見るということに終始していた点です。



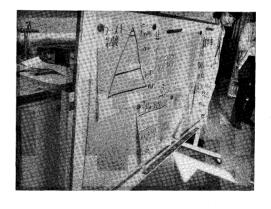
「こんなのはイヤだ」「こんなだったらいいのに」という問いの立て方とは違うものがあるはずですし、 日本に住む人がよいと考えることが必ずしもインドで当てはまるとは限らないと思います。 そうした 点に注意しなくては、結果として上からものを見ることになりませんか?

- ・わかりやすくしようとする姿勢がよかったです。でももう少し《インド文化から入る→生活→カースト→児童労働》という手順だともっととっつきやすくなるのでは?
- ・インドの子どもたちはこんなに苦労していて、おとなと同じ仕事をしたり、学校に行けなかったりして悲しいときとかイヤなこともいっぱいありそうでした。(インドの子どもたちかわいそ~)こんなことがあってもインドの子どもたちはたくましく生きているんだと思いました。
- ・権利とは、よりよく生きるための道具ということかなと思った。
- ・日本では児童労働問題が身近にないように感じるが、同じ日本人の子ども、もしくは在日外国人の子どもたちの問題を取り上げると子どもたちに伝わり易いのかな、と。
- ・すごく感動した。インドの子どもたちにはすごくがんばってほしいと思っています。
- ・静かだった、インドの説明は難しいかな。
- ・インドの働いていない子どもたちのことを知りたい。
- ・グループディスカッションの説明や言葉の説明をより詳しくしていただけたらなと思った。

■ふりかえり

・児童労働についての説明や働く子どもたちの状況を丁寧に説明したが、そのため時間が足りなくな

った。困難な状況にいる子どもがただかわいそうな存在ではなく、彼らがNGOに出会って自分の権利を知りどのように成長したか、自分たちが権利の主体として活動することによってどのように環境を改善しているかを残り時間で伝えた。ただ当初の最終目的である日本の子どもにも同じ権利が保障されていると気づくところまでいたれなかったことが残念。日本の子どもたちが権利条約を身近で大切なツールとして活用できることを知り、エンパワーされるよ



うに働きかけたい。国際子ども権利センターは過去の活動の中から得た教訓を力とし、微力ではあるがこのようなプログラムを練り上げて、地域社会に働きかけて行きたいと思っている。

- ・子どもたちに思ったより参加してもらえなかったのが残念だった。場所が急に変更になったため戸 惑いがあった。
- ・また遅れてきた参加者がいて、時間が短くなりプログラム全部を丁寧に行うことができなかった。 しかし、人数が少なかったので、参加者とじっくり話ができよかった。こちらもたくさんのことを得ることができた時間だった。今回の準備を含めさまざまな経験を今後の活動に活かしていきたいと思っている。

(参加者人数:小学生2名を含む、16名)

戦争で幸せになる人はいない

かわにし平和キッス

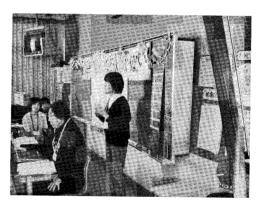
■分科会のねらい

イラク「人間の盾」参加者・高藪繁子さんを囲んで、イラクの人々や、子ども達の様子を聞き、私 達にできることは何かを子どもも大人も一緒に考え合おうというテーマで設定した。

■当日の流れ

- ・かわにし平和キッズの紹介とこれまでの活動をパワーポイントを使ってキッズのメンバーが報告。
- ・高藪さんのイラクの報告。

現地で撮影された写真をもとにイラクの人々の様子 や、子ども達の様子、米軍の攻撃で破壊された建物など の報告を聞いた。中でも印象に残ったことがいくつかあ

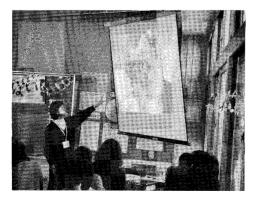


る。まず、高藪さん自身がこの状況で黙っておれない・じっとしておれないという思いで行かれたということ。イラクの人々とりわけイスラムの社会の人と人とのつながりの強さや家族に対する思いの強さ。クラスター爆弾や劣化ウラン弾の破壊力と残酷非道さ。アメリカ兵の幼さと、彼らは本国に早く帰りたいと願っていることや、精神不安定に陥っていること。結局石油施設だけが残されたということなど、改めてアメリカの石油のための戦争だったと思い知らされた。

■意見・交流

多くの参加者があり活発な交流があった。

平和キッズのメンバーから「小学生の時一緒にやっていた友達が中学生になったら『平和・戦争?



ダサい…』とか『かっこつけてる・ぶりっこしてる』といわれ非常にいやな気持ちになり元気をなくしている。と発言があった。それに対して北摂で平和活動している女子高校生から「私もはじめは、恥ずかしかったけどすごく勇気がいったけど、高藪さんは自分が思ったからイラクへ行かれたんだし、結局自分がどっちを向いて生きていくか覚悟するということだと思う。何を大切にするかだと思う。そう思ったら恥ずかしくなかったし強くな

れた。」またある女性からは、「世界では、イラク戦争反対のデモに百万人の人が参加している。日本

だけとても少なかった。あんた達は、世界の人々と同じ思いで活動しているんや。自信を持ちなさい。」と強力なエールが出、キッズの子ども達は大きなパワーをもらった。その後、小学生の「ぼく達もがんばる。」という声とともに大人の状況も浮かび上がってきた。おとなも周りの状況に流されている。戦争体験者の二人の方の発言が重みを持って響いてきた。「オキナワは今も平和ではない。幸せではない。基地がある限り・・・」「反戦デモにいった。誰も来ていなかった。しかし、自分にできることは何かと考えてひと声出していくこと・積極的に動くこと・よそ事と考えたら何も生まれない」

他にも貴重な意見をたくさんいただいた。結局は、「自分を裏切らず、自分を大切にしながら、貫いていく事。それは、子どもも大人も同じである。」とこの場に集った誰もが確認し、元気になった会だった。

■このとりくみをふりかえって

この分科会自体多くの参加者があり活発な意見交換が 行われた。それだけ関心の強い問題であるということで あろう。ひとり一人が、どう生きるのか、何を大切にし ていくのか改めてはっきりさせることができた分科会で あった。

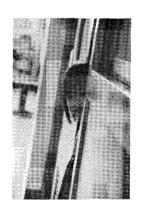
かわにし平和キッズとして、2003年5月ごろからこの フォーラムの実行委員会の一員として参画し、時には遅 い時間になったりしたこともあったが、子ども達の『や



りたい』という思いに世話人であるおとなの私達が引っぱられてここまでやれたなあと改めて子ども達に脱帽する。子ども達は、6日の交流会や、宿泊でもっといろいろな人と交流したらよかったと反省しているようだが、各地で活動している子ども達がたくさんいることを知って元気づけられたようだ。後日、会の参加者の方から励ましのお手紙などをいただき、何かをすることで人とつながれるということにも気づかされた大きな経験であった。たくさんのみなさま方、ありがとうございました。

(参加者人数:76人)





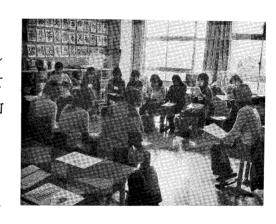
第7分科会

日本に住む外国籍の子ども達の今

特定非営利活動法人 多文化共生センター 多文化共生センター・ひょうご

■目的

担当者の活動地域である神戸・深江地域を中心として、定住する外国籍の子ども達が学ぶ権利を侵されている現状を知ってもらう。また多文化共生社会とは何かについて考えてもらう。

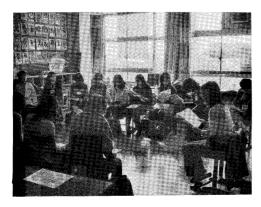


■流れ

- ・多文化子どもの歌集を聞いて、どこの国の童謡かク イズ
- ·参加者自己紹介
- ・多文化保育園の活動紹介、こうベ子どもにこにこ会の活動紹介
- ・地域の就学年齢時の状況、問題点
- ・班にわかれて、各自の問題意識をシェア
- ・各班で出た話を代表者が発表

■参加者の反応

保育士さんが数名おられ、多文化保育園でのカラーコンシャスなどのアクティビティに関する話を 興味深そうに聞いておられました。実際に支援に関わっておられる方や学校の先生は、どうやったら 学校を変えていけるのか、話し合いが盛り上がっていました。



■企画者側のふりかえり

国内の外国籍の子どもたちに関しての関心は、やは り、日本人の子ども達に関してより低く、参加者数は 少なかったが、それだけに熱心な方たちで班での話し 合いは時間が足りなかった。各班で出た意見を全体で シェアする時間をもっと多く確保できるように時間配 分する必要があった。

(参加者人数:15人)